

第二十四回

香川の伝統的工芸品展

香川の伝統的工芸品

※今回出品品目のみ

古くから海上交通の要衝として開けた香川県には、豊かな風土の中で育まれ、人々の手から手へと受け継がれてきた工芸品が数多くあります。これらは、天然の原材料を用い、昔ながらの技術・技法により作られているもので、今日でも生活の場で愛用され、人々に安らぎと潤いをもたらしています。県では、これらの全国に誇りうる伝統ある工芸品を「香川県伝統的工芸品」として指定する制度を設け、現在37品目を指定し、その普及を図っています。今回は製作実演等を通して工芸士や工芸品と身近に接していただくとともに、高度な伝統技術による現代感覚あふれる作品をご紹介します。

■香川漆器：香川県漆器工業協同組合・佐々木實治
★経済産業大臣指定伝統工芸品(昭和51年2月26日指定)
江戸時代、高松藩主が茶道・吉道に付随して漆器を奨励したのが漆器の産地づくりの始まりです。その後、香川漆器の始祖と言われる土橋象谷が中国の漆技術を取り入れた幾多の技法を開発し、今日の基礎を築きました。その技術も随分存清、彫漆、象谷後継者ほか多数岐にわたり、製品も漆平飾り、漆の至内調度品から、盆、花器、菓子器などの小物類まで広い範囲に及んでいます。

■欄間彫刻：香川県欄間彫刻組合・小比賀正
通風や採光のための欄間に、彫刻をほこした欄間彫刻は、桃山時代から江戸時代中期にかけて、日本間の装飾として欠かせないものとなりました。松平頼重公をまつてきた飛騨の木工職人によって伝えられたと言われている欄間の欄間彫刻も、次第に一般家庭に普及するようになり、欄間の美しい木目を利用して、こまやかな細工をほこされた製品には、時代の風情が漂っています。

■組手障子：香川県スリイワッド協同組合
日本建築の香川の障子切りとしてなくはない障子は、鎌倉時代につくられたのが始まりです。その後半なる実用としてのみでなく、障子に様々な装飾を加えること(組手加工)によって、書院障子、雛障子をはじめ、今日でも広く利用される障子を通して、こまやかな光は、私たちにほのぼのとした安らぎを与えてくれます。

■肥後木：有クラフト・アオカ
肥後は、樹齢数百年の老松の幹の部分で、脂分を多く含むので、気候風土の関係で、香川県では昔から良質のものが採れ、肥後を用いたくろくろ仕上げの木製品は、江戸時代からつくられてきました。じっくりと時間をかけて完成された製品は、彩色を施さない自然の木地のままの美しさが、独特の調和をかもしだしています。

■志徳杖：香川県下駄製造組合
高松から東へ15キロ、さぬき市志徳は全国に誇る下駄の産地です。町内には、原料となる荒取りされた桐材がうす高く積まれ、町の風物となつています。志徳で桐下駄づくりは、はじまったのは明治40年。時は、近隣の需要をまかなう程度のものでしたが、大正初期には生産量が急増し、今日の基礎を築きました。熟練した職人の手により、約40工程を経てつくられる桐下駄は、木肌のぬくもりをほのぼのと感じさせてくれます。

■鎌刀：青田製成上野勲
天保8年、金尾大権現の祖建立の祈、全国から集まった宮大工によって始まったと伝えられる一刀彫の技法は、明治30年ごろ開された琴平工業学校彫刻科に伝承され、讃岐ごんごんの特産品土産物として普及し、叩きノミの荒々しい刃痕を残しながら、細部に小ノミをきかせた、大胆にして細心なノミ使い、その巧みな彫りは、秀逸した職人芸々に伝えています。

■桐箱：遠久隆夫
桐箱は、湿度を防ぐだけでなく、木目が美しく光沢があるために、古くから香川各地の神社仏閣で生物として重宝されてきました。その後、お茶箱、茶器入れ箱など庶民の生活場において普及してきて、軽くて柔らかな桐を使って組み立てられた製品は、温かみのある品の良い仕上がり特徴となっています。

■菓子木型：有市原
和菓子づくりに欠かせない菓子木型は、江戸時代からつくられ始めたといわれています。香川県においては明治30年頃からつくられたといわれた材料は樹齢100年をゆう超えられたり、魚や花などの図柄を細彫りするノミ、彫

刻刀で、左右凹みを造り彫っていきます。完成した木型を二枚重ね、和菓子(あんこ)などの材料を入れて抜き出すと、菓子木型でできるとは、私たちが目と舌を満足させてくれる和菓子づくりに欠かせないものなのです。

■調燈籠：有三好隆所
調燈籠は、四国八十八ヶ所の奉納提灯として発生しました。そのため、寺特有の図柄や紋様が用いられ、一極彩色に飾られた提灯が、今なお神社仏閣に飾られています。その技法は、調燈籠一本掛けといわれる香川独特のもので、一本の竹を切り、その竹を提灯の筒に挿し、中で三重構造の提灯づくりに使われます。一子相伝で継承されてきました。最近では、インテリア提灯や新しい技法でつくられた提灯が広く解され、明かりの彫刻として高い評価をうけています。

■一関屋：株民芸協会
一関屋の技法は、江戸時代の寛永年間、明国より帰化した漆師飛米一関が創案したもので、いわれています。木や竹でつくった下地に和紙を張り重ね、日本古来の防水剤である桐油を塗って仕上げます。和紙本来の粘りが加わり、長年の使用に耐える強さが生まれます。製品は、盆や皿などの器類から小物家具まで多彩で、本泉特産のうづもこの技法が生かされています。

■丸うちわ：香川県うちわ協同組合連合会
★経済産業大臣指定伝統工芸品(平成9年9月14日指定)
丸うちわは、江戸寛永年間に金比羅宮参拝客への土産品として、金印入りの丸柄の漆塗りやわらび塗り、象谷一門の産物などが数多くつくられてきました。現在では、この平柄のものも主流に伝統的な竹製ものがつくられてきています。その用途も、涼用や炊事用など日常生活に密着したもののほか、装飾用や贈答用など様々なものがつくられてきています。

■竹一彫彫：西村文男
わが国の竹彫技術は中国から伝来し、すでに奈良時代には盛んに行われていたといわれています。香川の竹彫は、象谷一門玉積谷が確立した。調燈籠が起源といわれ、象谷一門の産物などが数多くつくられてきました。現在では、この平柄のものも主流に伝統的な竹製ものがつくられてきています。その用途も、涼用や炊事用など日常生活に密着したもののほか、装飾用や贈答用など様々なものがつくられてきています。

■古土壺：香川県古土壺製造組合
壺は古代には陶器として用いられ、薄手で、重なり折りたたむのをいいます。その後次第に厚みのあるものとなり、平安時代にはほぼ現在の形を整えるに至りました。こうしたなかで、公家や武家、寺社などにおいて、格式空間を形づくるために、一定のサイズと一定の固有の壺が生まれてきました。このような古土壺製造技法は、京大阪から讃岐の地にも伝えられ、現在香川や高松などにおいて用いられています。

■陶本焼：有崎剛吉製造所
三豊市焼中町の陶本焼は、近くで良質の粘土が採れることから、古くより陶器の産地として素朴な産物が焼かれています。器は、器は俗に「ぼんち」といわれ、土管や鍋、土炒り瓦など生活雑器が中心で、赤銅の服か焼きがりは、明るい感覚にあふれる人々の日々の中で愛用されてきました。かつては、ぼんちと呼ばれた行商人が、製器を商車で積み、雲守山を越えて、瀬川河津まで売歩いたといえます。

■調燈籠瓦：神内俊二
県内各地では、古くから瓦作りが盛んに行われていたことを物語っています。おそろい瓦瓦が感じられるように、古くから瓦作りが盛んに行われていたことを物語っています。おそろい瓦瓦が感じられるように、古くから瓦作りが盛んに行われていたことを物語っています。

くからつくられていたのではないのでしょうか。その後、江戸後期に、瓦が民家の屋根にも普及してきます。装飾瓦も多種多様のもので製造されるようになり、その技法が今日でも伝承されています。

■打出銅器：大山柳太
銅は金銅の中でも比較的軟らかく細工がしやすいことから、古くから金工の材料として用いられ、様々な生活用具に加工されてきました。打出もその一技法で、取り除いた銅板に熱を加えながら、大筒や金筒でたたいて目的の形に仕上げていきます。この技法でつくられた銅器は、地金がしまり大で、熱伝導率が高いため、銅釜や湯沸かしなどに適しています。飽きることない落ち着いた佇まいは、使い込めば使い込むほどに深い味わいが出てきます。

■保多織：株岩部保多織本舗
保多織は、高松藩主松平頼重公の命を受けた京都の織物師北川伊兵衛常吉が創案した徳島の組織を持つ絹織物で、松山、これを用いた織物として、明治維新以降までその技法を継ぎ、一般の使用を禁じてきました。保多織という名は、丈夫なことから、多年を保つという意味で付けられたといわれ、独特の風合いを持つその製品は、香川県の代表的な織物として、多くの人に愛用されています。

■調燈籠のり染：有大川原色本舗
調燈籠のり染は、もろ米でつくった防染のためののりを、簡拙きや型紙により模様状に布地に置き、密がみつけたら、刷毛で引染めして染め上げるもので、県内各地で行われてきました。とりわけ高松城下の御厨下には染屋が軒を連ね、着物の「ふんどし」地、たん子生活に密着した様々な染物がつくられていました。その染色の技法は、今に引き継がれ、伝統と新しい創造に根ざした染の素晴らしさをみせてくれます。

■調燈籠のり染：有富武蔵吉商店
神仏の祭りに登場する獅子頭の発祥は、応神天皇のころに中国から渡来し、奈良朝前期の伎楽面にも由来するといわれています。調燈籠の獅子頭は、あご、耳、取手など一部を除いて張子の手法によりつくられていました。粘土や木製の型に和紙を張り合わせ、厚紙を貼った後、糊や漆で漆地をつくり、様々な装飾を施して完成となります。乾漆づくりに、ため軽量で丈夫なところが大きな特色です。

■高松張子：乃村七重
高松市内の鍛冶屋には、古くから玩具や人形を商う店が軒を連ね、様々なモテチャ類がつくられていました。張子細工もこの一つで、デコさんといわれる人形玩具や面々が子供達のおき遊び友達となっていました。とりわけ、おまき伝説にちなむ「ほうごん」は、全国にも知られており、そのほのぼのとした素朴な味わいが多い人々の共感を呼んでいます。

■張子虎：真鍋健則
張子虎は、中国の成王崇禎が国に伝わり、つくられ始めたといわれています。虎の武勇にちなんで、子どもの健康やかな成長を祈る気持から、鹿年の節句や八朔祭の飾り物として、古くから愛用されてきました。ピンと張ったヒゲやゆらゆらと揺れる張子虎の首など、エモーションは、獅子玩具や誕生祝、熊鷹祭の縁起物としても喜ばれています。

■調燈籠のり染：調燈籠のり染
調燈籠のり染は、もろ米でつくった防染のためののりを、簡拙きや型紙により模様状に布地に置き、密がみつけたら、刷毛で引染めして染め上げるもので、県内各地で行われてきました。とりわけ高松城下の御厨下には染屋が軒を連ね、着物の「ふんどし」地、たん子生活に密着した様々な染物がつくられていました。その染色の技法は、今に引き継がれ、伝統と新しい創造に根ざした染の素晴らしさをみせてくれます。